ご　挨　拶

広島市医師会は被爆70周年を迎え、あの日ヒロシマで何が起こったのか、そして被爆者の身体にどんな影響があったのかをヒロシマと世界の若人へ語り継ぎ、被爆体験を次の世代へ継承し、核兵器のない戦争のない平和な世界を築くため、この市民公開講演会を開催します。本講演会では、放射線の人体に対する影響について基調講演を行います。そして、被爆体験を次世代へ継承すべく、アメリカ・ブラジル・日本で高校生に被爆体験を語ってこられた被爆者3人を各国よりお招きし、ヒロシマの若人にもそのお話を語っていただきます。広島市医師会の原点は、70年前のあの日にあります。あの日、2168名の医療従事者が被爆し、うち60名の医師が殉職しました。被爆した医療従事者は我が身も顧みず、医薬品もほとんどない状況で、ひたすら被爆者の救護活動に専念しました。この原点を決して忘れることなく、広島市医師会は、あの日の被爆体験の継承と被爆医療の推進、および核兵器のない戦争のない平和な世界を希求することが使命と考え、行動を続けていきます。

一般社団法人 広島市医師会 会長　松村　誠

展示協力

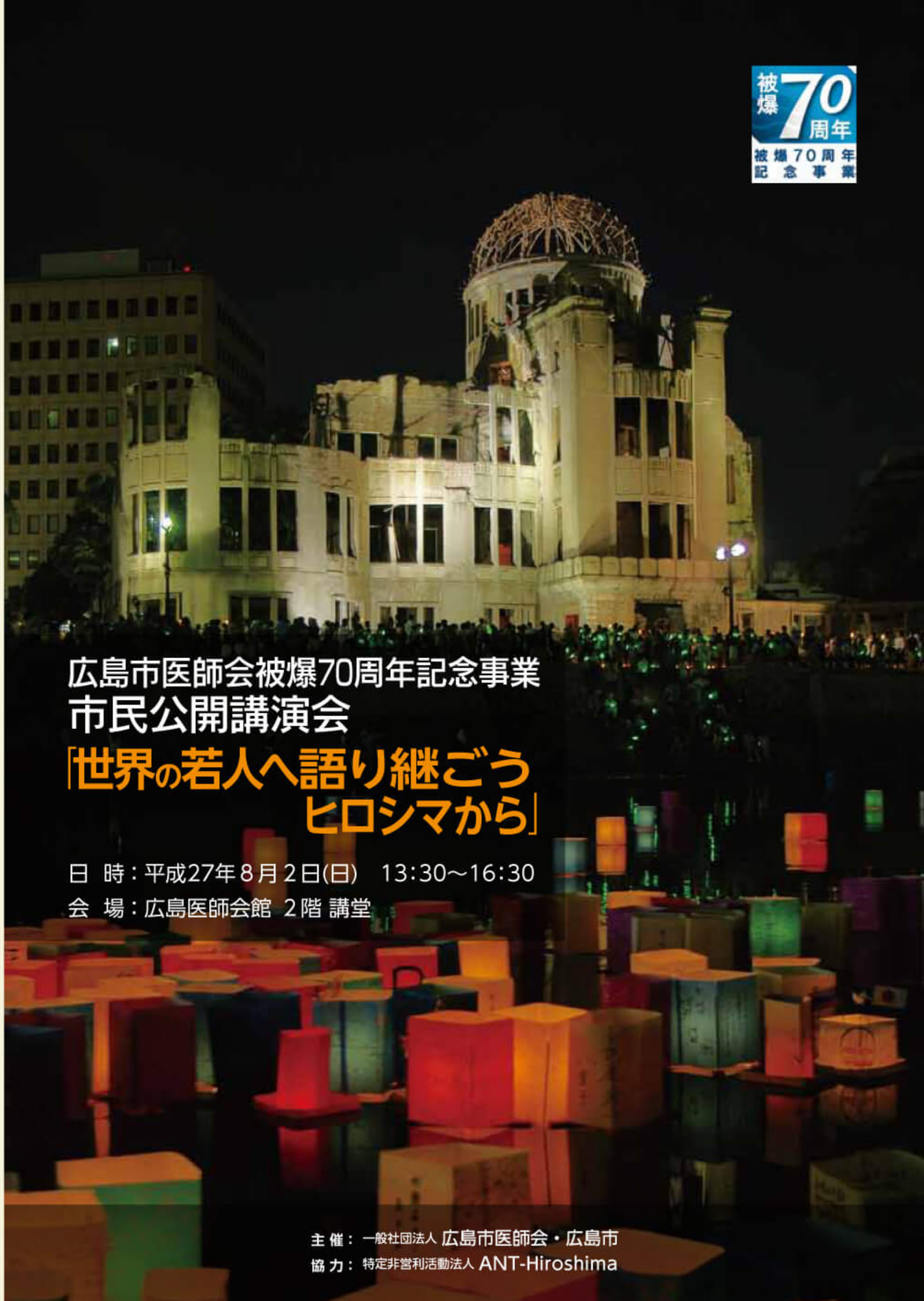
～次世代と描く原爆の絵 2014～

このたびの市民公開講演会開催にあたり、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの生徒の皆さんが、被爆体験証言者と共同で制作に取り組まれた「原爆の絵」８点をお借りし、展示させていただきました。

制作にあたり生徒の皆さんは、証言者の被爆体験を聴き、想像を絶する光景をどう描くのか悩みながら、資料を集め、証言者と何度も打ち合わせを行い、この「原爆の絵」を描かれました。

それぞれ絵には、被爆体験証言者と生徒の皆さんの「伝えたい、伝えなければならない」という熱い想いが表現されています。

ぜひご覧いただいて、その想いを受けとっていただければと思います。



被爆70周年
被爆70周年記念事業

広島市医師会被爆70周年記念事業
市民公開講演会
「世界の若人へ語り継ごう ヒロシマから」

日　時：平成27年８月２日(日)　13:30～16:30
会　場：広島医師会館 ２階 講堂

主 催：一般社団法人 広島市医師会・広島市
協 力：特定非営利活動法人 ANT-Hiroshima

オープニング　13:30～

≪プログラム≫

1　バレエ音楽「コッペリア」よりマズルカ　　レオ・ドリーブ作曲
2　Sinfonia graduell　　ウリ・ゲッテ作曲
3　Nucleus　PartⅡ　Manhattan Project
　　PartⅢ　Enola Gay
　　PartⅧ　An optimistic view into the future

〈Nucleus 、Sinfonia graduell　フル・オーケストラ版について〉

Nucleus　PartⅧは、2013年に本校オーケストラのために編曲され、その年のサマーコンサートで初演しました。また、1991年に作曲されたSinfonia graduell は Nucleus　PartⅡ、PartⅢと共にこのコンサートのために編曲され、今回が初演となります。

Ulli Götte(ウリ・ゲッテ)

新しい音楽、ジャズ、とくにミニマルミュージック（音の動きを最小限に抑え、パターン化された音型を反復させる音楽）の第一人者。20年間、ドイツにあるほかに類を見ないprocessというアンサンブルの指揮者として活動。ミニマルミュージックの作曲者として、その中の「古典」とされているスティーブ・ライヒやフィリップ・グラスの遥か彼方にみずからの道を切り開いており、多くの室内楽、オーケストラのために曲を作曲している。カッセル大学、ドユイス大学で教授を勤め、作曲家や作家として活動する傍ら、楽器演奏を教える。2002年にカッセル文化賞を受賞。

<Nucleusについて>

全8楽章から成るこの曲に題名は「核」というテーマで、小編成のアンサンブルとして2012年に作曲されました。第1楽章では「核の力」について、第2～4楽章では1945年8月6日に原子爆弾が投下された広島、第5～7楽章では2011年に起こった東日本大震災の被害を受けた福島第一原子力発電所での大量の放射性物質の漏洩を伴う原子力事故を、また、最終楽章では歴史を教訓としながら、未来へ進もうとする希望が表現されています。

<広島なぎさ中学校・高等学校管弦楽部からのメッセージ>

この度は被爆70周年という節目にこのような機会を与えていただき、大変光栄に思っております。日々私たちがオーケストラとして活動ができているのも平和があってこそです。

私たちには広島の学生として、原子爆弾による悲惨な戦争の歴史を後世に伝えていく使命があります。私たちは、オーケストラとして「音」でその気持ちを表現します。ドイツの作曲家　ウリ・ゲッテ氏が表現した「ヒロシマ」を、そこに住む私たちの思いを通して形にできることに意義を感じると同時に、大きな責任も感じます。

「核」の恐ろしさが叫ばれる今、私たちは被爆者の方々の高齢化が進むここヒロシマの子どもとして何をすべきか、ここに一つの答えがあるように思わずにはいられません。

講演会　14:30～

開会挨拶　一般社団法人 広島市医師会 会長　松村　誠
来賓挨拶　広島市長　松井　一實 様　　広島市議会副議長　沖宗　正明 様

基調講演　14:40～

「放射線の人体に対する影響について」

講師：（公財）放射線影響研究所 前理事長
大久保　利晃 先生

1966年　慶應義塾大学医学部卒業。1978年　医学博士号取得（慶應義塾大学）。2002年4月～2005年3月 産業医科大学学長。2005年7月～2015年6月 放射線影響研究所理事長。2015年7月～ 放射線影響研究所顧問研究員。1997年 労働大臣功績賞受賞。2000年 日本医師会最高優功賞受賞。

パネルディスカッション　15:15～

米国・ブラジル・日本での被爆体験継承について

座長（公財）広島原爆被爆者援護事業団理事長/
広島大学名誉教授
鎌田　七男 先生

1961年　広島大学医学部医学科卒業。1970年　医学博士号取得（長崎大学）。1985年～2000年　広島大学原爆放射能医学研究所血液学研究部門教授。1997年～1999年 広島大学原爆放射能医学研究所所長。放射線被曝者医療国際協力推進協議会（HICARE）会長なども歴任。2001年～ 広島原爆被爆者援護事業団理事長。1999年 中国文化賞受賞。2009年 日本対がん協会賞受賞。主な著書「広島のおばあちゃん」「One Day in Hiroshima」。

米国広島・長崎原爆被爆者協会会長
据石　　和 氏

1927年、米国パサデナ市生れ。生後9ヶ月で両親の故郷日本に帰国。18歳で南観音の自宅前で被爆。爆風で倒れた建物の下敷きとなり、重傷を負った。戦後、米国に戻り、結婚。1971年、「米国原爆被爆者協会」創設後、副会長に就任。被爆者であるがゆえに医療保険にも加入できない米国在住の被爆者の現状を訴え、在外公館での被爆者手帳の申請交付受付、日本語での在米被爆者検診の実現に寄与した。1992年、「米国広島・長崎原爆被爆者協会」が創設され、後に会長に就任。平和教育の一環としてロサンゼルスの日本人補習授業校などで平和特別授業を実施。2012年、旭日双光章受章。

ブラジル被爆者平和協会会長
森田　　隆 氏

1924年広島生れ。21歳で憲兵として従事中に爆心地より1.5㎞で被爆。8月9日まで市内で救助活動を続けるも、病状悪化のため広島郊外の臨時病院に入院。退院後、10月まで軍事に就く。終戦11年目、ブラジルに移住。1984年、現地で苦しんでいる被爆者の存在を知り、17名の被爆者とともに、「在ブラジル原爆被爆者協会（旧名称）」を設立。2008年、「ブラジル被爆者平和協会」と名称を改め、会長として現在に至る。現地の中学・高校・大学・原爆展等で被爆証言を行う活動のほか、90名の証言を集めた「南米在住ヒバクシャ　魂の叫び」を出版し、各団体・学校等に寄贈を行う。2015年、サンパウロ市議会よりサンパウロ市名誉市民賞を授与される。

広島県原爆被害者団体協議会理事長
坪井　　直 氏

1925年生れ。20歳で爆心地より約1㎞の広島市富士見町（現広島市役所付近）の路上で被爆。被爆後、9月25日まで約40日間意識不明となる。現在まで、10度の入院。1986年、広島市立城南中学校長を退任。日本原水爆被害者団体協議会代表委員、広島県原爆被害者団体協議会理事長、被爆を語り継ぐ会会長として活躍。海外に渡航し平和への訴えを行う。2005年、広島市民賞受賞。2010年、広島市政功労表彰。2011年、広島大学非常勤講師。同年、谷本清平和賞受賞。広島市西区在住。